

特 集

平成 23 年度山口県医師会
男女共同参画部会総会、特別講演会

と き 平成 24 年 3 月 4 日 (日)
ところ 山口県医師会館

最初に、山口県医師会の木下敬介会長、つづいて男女共同参画部会の松田昌子部会長が開会の挨拶をされた。

開会挨拶

木下会長 本日は大勢の方にお集まりいただき、ありがとうございます。



平成 19 年 3 月 11 日、女性医師参画推進部会設立総会以降、本日の総会は 6 回目となります。

平成 23 年度より男女共同参画部会に名称変更していますが、これは一つの進化であると考えます。いろいろな部会がありますが、この部会ほど急速に発展した部会はありません。毎年の事業報告、事業計画及び予算をみていただければよく分かります。特にこの 1、2 年の間にたくさんの郡市医師会に部会ができたことは、大いなる進化、発展だと思います。

私が会長に就任した平成 20 年度は、この部会は会内活動の一部門でしたが、女性医師対策は医師確保対策であるということに気がきましたので、二期目の平成 22 年度からは、勤務医、臨床研修医、女性医師の三つの切り口から医師確保対

策に取り組むこととし、勤務医・女性医師を会外活動部門に変更し、重点活動として取り組んでまいりました。

話は変わりますが、キリスト教社会においては、医師という職は普通の専門職より一つ上のプロフェッションと位置付けられており、医師と牧師と弁護士は聖職と言われています。人の不幸を飯の種にしている職業だからこそ、倫理観、道徳観、使命感をもってあたなければならない職業です。女性医師の先生方が、出産や育児により離職するとなかなか復帰するのは難しいと聞いています。せっかく聖職と呼ばれる医師となったのに非常にモッタイナイと思います。

女性医師を取り巻く勤務環境の改善を図り、働きやすく、そして子育て後も復帰しやすい環境となるよう強く願っています。

松田部会長 この部会が立ち上がり、6 回目の総会を迎えました。

女性医師が人として、医師として、自分の生き方を実現することを応援したいという目的をもってスタートしましたが、設立当初は、何から手を付けていいのか皆



目わからないという状況でした。しかし、5 年間の活動の中で、問題点がある程度はつきりし、活動の方向性も定まってきつつあると思います。

しかし、部会の活動の内容を、第一線で仕事をしておられる先生方に伝えることがなかなかできない、逆に、現場で何が必要なのかを聞くルートがないということにずっともどかしさを感じてきました。この問題に今ようやく解決の光が射してきました。後ほど発表していただきますが、各都市医師会で部会が立ち上がり、ネットワーク作りが進みつつあることがその理由です。このことはこれからの男女共同参画活動にとって非常に心強く、有意義なものになると思います。

本日、この総会にお集まりいただいた先生方、学生さんには、この場を交流の場としていろいろな方とお話いただき、今後のそれぞれの活動の輪を広げていただきたいと思います。

総会後の特別講演には女性としてユニークな経歴をもたれる野尻知里先生にお越しいただいておりますので、どうぞ最後までよろしくご参加ください。

1. 平成 23 年度事業報告

各ワーキンググループから事業報告、以下に纏める。

(1) 勤務医環境問題への取り組みについて

黒川典枝副部長

今年度は女性勤務医ネットワークを作成することに主眼を置いた。目的は本部会の活動及び女性勤務医に有用な情報を女性勤務医に直接届けることである。現在、48 病院 290 名のネットワークであるが、毎年度、連絡係及び女性医師数の確認を行い、情報発信を続けていく。

(2) 育児支援への取り組みについて

崎里節子保育相談員

女性医師が就業継続するために必要な支援のうち、特に育児の面で、可能な支援方策を検討し実施している。主な活動として、県内保育施設及び院内保育園等の情報提供並びに保育サポーターバンクの運営が挙げられ、保育サポーターバンクのこれまでのあゆみ、制度の内容、実績等が報告された。

(3) 女子医学生キャリア・デザイン支援について

田村正枝理事

平成 21 年度より、夏休みに女子医学生を対象としたインターンシップを実施している。このインターンシップは、年々増加している女子医学生が、先輩女性医師が働く現場を見ることにより、将来の医療を担う責任感を養い、医師として仕事を続ける自覚を育てることを目的としている。

具体的には、山口大学医学部 2 年生から 5 年生の女子医学生が夏季休暇の間（7 月末から 8 月にかけて）、医療機関で働く女性医師の下で、数日間一緒に過ごし、仕事を辞めずに働き続けていくためのモデルとして、先輩女性医師にご指導していただいている。

平成 23 年度の参加女子医学生は 28 名。研修実施後のアンケート結果では、受入女性医師、女子医学生ともに、ほとんどの方にこのインターンシップは有意義である（まあまあ含む）と回答していただいた。

松田部会長より、このインターンシップは医学実習ではなく、女性医師の生き方を学ぶことが目的であると追加された。

(4) 地域医師会との連携について

大島眞理理事

本部会の活動内容等の情報が女性医師に行き届かない、女性医師の男女共同参画に対する意識が低い等、本部会と各地域が連携することが必要であるため、各都市医師会に女性医師部会の設立を依頼した。現在、8 地域に女性医師部会が設立された（準備中含む）。

今後の計画として、各地域女性医師部会活動のバックアップ、単独医師会で女性医師部会設立が困難な地域へのサポート等を行う。

(5) 広報活動について

田村博子県医理事

平成 23 年 2 月にリニューアルした本部会のホームページの掲載内容を説明。

また、平成 25 年度に山口県医師会引き受けて、日本医師会男女共同参画フォーラムが開催されることが紹介された。



2. 審議事項

(1) 平成 24 年度役員選出（敬称略、50 音順）

- ・退任理事 今村 孝子（山口市）
田村 正枝（吉 南）
土屋 昌子（山口大学）
原 曜子（下関市）
- ・新任理事 榎 美穂（吉 南）
田村 博子（山口市）
徳田 信子（山口大学）
森谷 和子（宇部市）

(2) 平成 24 年度事業計画について

事業報告で説明した事業を継続、発展させていく予定である。

一 審議事項について、全員拍手で承認された。

3. 地域医師会女性医師活動紹介

7つの地域より女性医師活動が紹介された。

(1) 防府医師会女医部会

林田はるみ先生

県医師会に先駆けて平成 18 年 8 月に設立、以後、総会と情報交換会をそれぞれ年 1 回行っている。平成 20 年の総会には前内閣府男女共同参画局長の名取はにわ氏にお話しをしていただいた。その他、女性医師に対するアンケート、市内保育施設実態調査、男性医師に対するアンケートを行ってきた。

(2) 山口市医師会女性医師部会

野瀬橘子先生

平成 22 年 12 月に設立。平成 23 年度は 6 月に総会、平成 24 年 1 月には吉南医師会女性医師部会と合同で研修会及び懇親会を行った。

(3) 岩国市医師会女性医師部会

齋藤由希子先生

平成 21 年 3 月に委員会として設立。平成 23 年 11 月の総会では、事前アンケート調査を実施するとともに、若い女性医師の意見が聞けるよう国立病院機構岩国医療センターの女性研修医に声をかけた。

(4) 下関市医師会男女共同参画部会

奥園美子先生

平成 24 年 1 月に設立。設立総会では県医師会の保育サポーターバンクの紹介、記念講演を行った。その際、保育サポーターを託児室に活用した。

(5) 周南地区女性医師部会

とさかまさこ先生

25 年前から親睦会として続いてきた周南女医会を母体に、徳山・下松・光の 3 医師会合同で平成 23 年 9 月設立。事業内容として臨床研究の支援、相談窓口の設置、異業種交流会、情報交換及び懇親会の開催を考えている。

(6) 宇部市医師会・女性医師会員の会

中野朋子先生

平成 23 年 2 月に女性会員の会に関するアンケート調査を行い、平成 23 年 8 月に設立。生涯教育の場、会員間の親睦を深めて日頃のストレス

を解消することや、元気に生きるためのヒントを見つけることができる場にすることが目的とされ、手抜き家事や笑い療法士の紹介をされた。

(7) 小野田・厚狭郡医師会女性医師部会

西岡和恵先生

現在、小野田市医師会及び厚狭郡医師会合同で部会設立の準備を行っていることが紹介された。

4. 女子医学生の活動発表

山口大学医学部 4 年（女子医学生の会 en-JoY）

小川裕子さん



en-JoY とは山口大学医学部女子医学生が主体の組織で、平成 20 年度より活動している。名称のように「皆で一緒に人と人との輪を大切にしながら、女医として楽しく働

いていこう！」をモットーに、相互理解、意識向上、不安解消を図って山口大学の医学生の資質向上に寄与することを目的に活動している。具体的な活動としては茶話会の開催、学外プログラムへの参加、アンケートやインタビューの実施、en-JoY Letter の発行、学生への啓発を行っている。今後は山口から発信して全国ネットワークを形成することを考えている。

5. 特別講演「私の履歴書：ある女性心臓外科医の半生」

講師 テルモ株式会社上席執行役員

コーポレート CMO 野尻知里先生

印象記 特別講演を聴いて

田村 博子

今回の総会では、特別講演にテルモ株式会社上席執行役員コーポレート CMO の野尻知里先生をお招きした。野尻先生は京都大学医学部卒業後、心臓外科医として臨床の仕事をされた後、アメリカテルモハート社で人工心臓を開発された方で、昨年帰国し、現在はテルモ株式会社で次世代の人工心臓開発に携わっておられる。今回は 1) 人工心臓の歴史、2) Dura Heart®LVAS の紹介、3) 私の履歴書、4) 働く女性の実態と働く女性とい

う内容でお話しされた。1 時間の講演で膨大な内容のお話しだった。その一部をご紹介します、印象をご報告する。

まず前半は人工心臓の歴史から最先端のお話しまでを聴いた。アメリカでは心不全はナンバーワンキラー



講師：野尻知里先生

まず前半は人工心臓の歴史から最先端のお話しまでを聴いた。アメリカでは心不全はナンバーワンキラーで、人工心臓計画は 1960 年代からアポロ計画と並んで国家プロジェクトになったとのこと。心臓移植に代わる永久使用を目指して、最初の全置換型人工心臓（Total Artificial Heart）から左心補助人工心臓（Left Ventricular Assist System）へ、ポンプも拍動流から連続流ポンプへと開発が進んだ。Dura Heart®LVAS は体内植え込み型でコントローラーとバッテリーをバッグに入れて携帯しシャワーも浴びることができる。バンジージャンプは無理にしても、スキーの他、大抵のことはできるとのことである。2008 年に治験を開始、早くも 2010 年にアメリカに先駆けて日本で製造発売の承認を得たのは、device lag が問題とされ、医療ニーズの高い医療機器の早期導入の対象になったためであり、昨年には販売を開始されたとお聞きした。

ご自身のキャリアの中では、何度も挫折を味わったとのことである。最初はノーベル賞を目指して入学した京大理学部で「女はいらない」と言われたこと。次は翌年同大医学部に入学し直し、卒業後心臓外科に入局しようとしたが、ここでまた「女はいらない」と言われたこと。それでも諦めず心臓外科医として研鑽。その後、留学したアメリカ・ユタ大学で生涯の師となるコルフ先生に出会い、その研究者魂に感銘を受ける。コルフ先生のモットーはオランダのウィリアム沈黙王の「Even without hope I shall undertake. Even without success I shall persevere.」というもの。これを叩き込まれて帰国し医局に戻ったところ、以前ほど臨床が楽しくない。医学と工学が融合していたユタの研究に心を残してきたようで、ここで 3 度目の挫折感を経験。それから縁あってテルモに入社し、人工心臓の開発を続けることになった。昨年米国テルモハート社の社長は辞し

たが、現在は東京のテルモ本社で、より小さくて高性能な次世代の人工心臓開発に携わっていらっしゃるそうである。

生涯の恩師コルフ先生のことを「研究のことになると幾つになっても少年のように目をキラキラ輝かせておられた」とおっしゃっていたが、まさに野尻先生も恩師と同じく、情熱をもって語られる様子に device の開発が本当にお好きなのだと感じられた。それでこそ、Dura Heart®LVAS という磁気浮上型遠心ポンプ補助人工心臓を世界で初めて商品化できたのだろう。

先生は医師の世界だけでなく、一般企業の世界に飛び込んで会社のトップとしてリーダーシップをとってこられた。企業における男女共同参画を世界と比較すると、日本はまだまだ進んでいない。また、アンペイドワーク（家事・育児）の 90%以上を女性が担っている国は日本しかない。ただ、女性が元気な会社は業績が上がっている。つまり、女性が生き生きと働ける会社は男性にとっても働きやすい会社なのだとお話しされた。調べてみると女性が仕事を辞める真の理由は、働いていく上で自分のキャリアがみえないことにあることがわかったそうである。つまり前例がないことに不安があるようだが、自らが良き前例となるようチャレンジしよう、仲間を増やそう、と呼びかけられた。また、山口県のネットワークを作ろうという発表に感激した。一人だけがスーパードクターでは駄目で、皆がなくてはならない。皆さんにもリードしていく女性のロールモデルになってほ

しいとも語られた。

先生のモットーは好きなことをする人生が一番楽しいということ。茂木健一郎氏が脳のアンチエイジングについて「好きなことをとことん楽しむ」、「新しいことに挑戦する」ことが秘訣だと言われたが、まさにその通りであり、皆様に「山は高いほど登り甲斐がある」とエールを送りたい、と話を結ばれた。

野尻先生は臨床の経験を多くの人を救う人工心臓の開発に活かしていらっしゃる稀有な存在だが、お話を聴いて、何よりもその揺るぎない姿勢が素晴らしいと思った。そして、以前 HNK の番組「プロフェッショナル」でおっしゃった言葉を思い出した。「プロフェッショナルとは…まず大事なのは、何にパッションを覚えるかを探すこと。それを見つけたら、もうしつこく粘り強くあきらめずやり続けること。障害があったら、それをスプリングボードにすることだと思います」。まさにこの言葉通りであり、トップアスリートのような印象を抱いた。

最後になるが、部会の取り組みに対して、5 年間地道に緻密に活動してきて県から地域に広がっているところが素晴らしい、学生さんが発表したように山口から全国に発信してほしいとコメントをいただいた。確かに今回の総会は予想より出席者も多く、5 年間の活動でずいぶんネットワークが広がったことが実感された。今後これが実効あるものになるよう、私たちも粘り強くやり続けなくてはならないと、先生のお話しの励まされた。



特別講演終了後、ロビーにて懇親会が開かれた。